

〔一般論文〕

ワールドフェスティバルに見る 多文化フェスティバルの変容と機能

—— 国際交流から多文化共生へ ——

渋谷 努

はじめに

本稿では、山形県鶴岡市で行われていた庄内国際青年祭および出羽庄内¹国際村²で行われているワールドバザールに注目し、担い手にとって祭りが持つ意義について検討する。その際には 1980 年代における日本の国際交流の潮流、地方都市でのその影響を受けた実情を踏まえる。さらに、1990 年以降の入管法改正に伴う外国人受け入れによって生じた外国籍住民の受け入れへと舵を切った国の方針の中で、外国籍住民の散住地域での「共生」のための実践も視野に入れる。そうすることで山形県鶴岡市で 30 年間以上開催されてきた「外国人」に関わるフェスティバルの意義の変容を、当時の日本社会の異文化や「外国人」への対応の変化の中でどのように変容を遂げているのか、また何が残存しているのかを明らかにする。

多文化共生を関したフェスティバルなどは 3F として批判されることが多い。竹沢は、日本の多文化共生では、多文化が 3F 「衣 fashion」「食 food」「祭 festival」に還元されがちである点を指摘している。続けて、このような 3F を積極的に打ち出すフェスティバルを多文化共生の啓発事業と位置付けるなら、幅広い層の日本人住民の理解を深める上で、ある一

定の役割を果たしてきたと一定の評価をしながらも、これらの華やかな側面に光が当たるなか、構造的差別や偏見等が影となり覆い隠されて、さらにそれらの文化が単なる消費の対象とされたり、政治的に利用されることもあると批判している（竹沢 2011: 5）。つまり樋口が論じるように一方的な同化とならないための「社会文化的領域での差異の維持」と資源の分配に関する「政治経済的領域での格差解消」の双方が必要であり、分配に触れない共生概念は「対等」な関係を実現する指針とはなりえない（樋口 2009: 8）。それは、オーストラリアの文化人類学者ガッサン・ハージが多文化に関するフェスティバルやイベントなどは、他者・異文化に対して内包的というよりも、むしろ封じ込めようとしていると指摘し、さらにホスト文化を実質的に豊かにするのみであり文化的搾取の営みであると痛烈な批判と通底している（ハージ 2003）。

このような批判では多文化フェスティバルをフェスティバルが開催されているその「場」で生じる結果のみから評価している。しかしフェスティバルを評価するためには、その準備段階や主催団体の活動を視野に入れ、主催団体の活動の中にフェスティバルを位置付け『『全体的な』社会的現象』（モース 2014: 59）評価することが必要である。多文化フェスティバルを「全体的な」社会的現象として捉えるために本研究では、既存研究ではあまり焦点を当てられることが少なかった主催、運営側の活動に着目し、担い手側にとってのワールドバザールの意義について検討する。今回取り上げるのは山形県鶴岡市で行われている出羽庄内国際村でのワールドバザールである。このワールドバザールは実行委員会形式で開催されているがその主たる組織は出羽庄内国際村である。

本研究で用いるデータは 2021 年から 22 年にかけて断続的に行った出羽庄内国際村で行った参与観察及びインタビュー、文書資料の収集に基づく。（2021 年 11 月 25 日、2022 年 1 月 14 日、3 月 5 日 -14 日、6 月 10-12 日）

1980年代における国際化と国際交流

1980年代は、日本では「国際化」がキーワードとなっていた。初瀬は、これまで国際化とは日本人が海外に行くことを意味しているのに対して、日本国内に住む外国籍住民に問題関心を向けることで「内なる国際化」という切り口が必要であると論じている（初瀬 1988）。また、それまでは国際関係は国と国との間での関係であるから、主体的に取り組むのは国であり、国を動かすエリートの役割とみなされていた。それが長洲知事のもとでの神奈川県では「民際外交」として、自治体による国際交流を企画立案していった。このような地方行政による国際交流事業はその後、他の地域でも積極的に行われるようになった。

また、国自体も地方自治体による国際交流を推進するようになり、1989年に旧自治相は「地域国際交流推進大綱の策定に関する指針」を都道府県、政令指定都市に示し、また各地域に国際交流協会を設立することを要請した（毛受ら 2003: 14-15）。この要請を受けて各自治体は国際交流協会を設立するようになった。

国際交流協会の中には、専従スタッフを置くところから自治体職員が出向して業務を行うところなど、その運営形態も多様である。また各自治体の外国籍住民の数に応じて、外国籍住民との多文化共生を重視しているところから、姉妹都市交流などの国際交流を重視しているところなど運営上も業務内容的にも多様なグラデーションを持った組織である。

地方の国際化は行政にとどまらず、市民による活動にまで広がっていった。北海道では、同様に留学生を集めホームステイさせることが函館で行われるようになった。鹿児島では留学生を農村地域に集め、ホームステイをし、地元住民との交流を行い、その中で多文化に関わる祭りを行なった「からいも交流」が1981年から行われている（加藤 2001）。当時の国

国際交流を考える際に大きな影響を与えたのがアメリカの国際関係に関する専門家であるアルジャーの『地域からの国際化』だった。この本の中でアルジャーは自分の活動経験を踏まえて、地域住民にとって、地域と世界のつながりを意識させることが重要であり、それが市民としての活動につながることを指摘している（アルジャー 1987）。また、ネットワーキングによってオルタナティブなアメリカ社会を実現する市民活動を促すリップナックらの著作も日本語に翻訳されて紹介されている（リップナック、スタンプス 1984）。このような著作の影響を受けて当時の国際交流は、世界と日本、さらに地域との関係を意識し、その中で主体的に活動できる地球市民（Global citizen）を育成することが主たる目的として論じられた。さらに、その及ぶ範囲は現在考えるよりも広く、国際交流に関する概説としては早い時期のものである『入門国際交流』（国際交流基金 1994）では、姉妹都市の友好関係や留学生の受け入れだけではなく、ボランティアとしての社会参加、低開発諸国に対する支援といった国際協力や活動の組織化としての NPO や NGO に関しても論じられていた。当時の日本ではこのように、国際交流とは国ではないアクターによる世界とのつながりを形成するものであり、それに触発されて自分達を相対化して捉え、そこから社会のあり方を考え、行動するものと捉えられていた。

そのような全国的に見られた地方の国際化や国際交流の隆盛の中で、鶴岡市でも国際交流のイベントが行われた。それが庄内国際青年祭だった。庄内国際青年祭は第1回を1985年8月1日－5日の5日間行った。以下では、このイベントの中心メンバーである Y 夫妻を中心としたアマゾングループの形成から、庄内国際青年祭までの活動についてみていく。

アマゾングループの形成と活動

庄内国際青年祭が始まるきっかけとなったのは、鶴岡市出身の文化人類

学者 Y がアマゾン地域などで集めた民俗・博物学的資料を持って鶴岡に戻ってきたことだった。Y は、持ち帰った資料を市民に展示するために、自宅でアマゾン資料館を開始した。それが 1982 年だった。鶴岡に、世界中を旅して歩いた人がいるという噂が広がり、その「変わった」人を見に若者たちが集まった。

2023 年当時出羽庄内国際村の常務の A もその一人だった。当時の集まりの状況を A は以下のように語った。

私のような若い人たちが、仕事が終わる 9 時くらいから Y の家に集まって、ある人はスペイン語を習う、そのあと軽食をご馳走になる、それ以外は集まって、無駄話をしている。20 代の後半でしたので、寝なくてもいいやというぐらいで時間を過ごして、いつも 12 時、1 時ぐらいに帰っていた³。

このように海外に興味がある、Y 個人に興味がある若者たちが集まるようになりアマゾングループが作られていった。そしてこの若者たちは、Y の家に集まるだけでなく、独自の活動を始めた。彼らの活動はアフリカ救援のチャリティバザーから始まり、海外から鶴岡などの庄内地区に來た人々を受け入れるようになった。そして、受け入れるだけでなく、自分たちが海外に行くことも始まり、フィリピンのルソン島で孤兒院や農業研修施設などを巡った（庄内国際交流協会編 1996: 6-18）。自分たちの活動をまとめた著作『我ら地球家族』の中で、活動の趣旨について以下のように述べている。

このような活動の理念とし庄内での草の根国際交流の一つの元祖とも言えるアマゾングループは、多くの交流を手掛けてきた。その特徴は、義務感や強制されたものではなく、自分たちも外国人も一緒に楽

しみながら交流する。自分の殻から出て素直に「他己」を受け入れ、心と言葉で現在の喜びをわかち合う。これがアマゾン流の交流である(庄内国際交流協会編 1996: 18)。

ここでは自分たちの活動を、自分たちが作り出した「草の根」であることを強調しており、また国際交流における他者と触れ合いそれを受け入れることの重要性を述べている。このような地域レベルでの国際関係を形成し地域を変えていこうとすることからは、地球市民意識を育もうという当時の国際交流の考え方に大きな影響を与えていたネットワーキングの発想を見出すことができる。さらに、外国人に対するサポートとして捉えるだけではなく、自己変革に主眼を置いていることが特徴的であり、これらの点が次に述べる青年祭にもつながっている。

庄内国際青年祭の運営とネットワークの拡大

以下の節では、庄内国際青年祭にとってのイベント開催の意味についてその社会的状況を踏まえて考察する。アマゾングループに初期から関わってきたBは、アマゾングループが始まった背景には、当時の鶴岡市内での若者たちの繋がりやの弱体化が挙げられると言っている。特に、それまで青年団などによって横のつながりが形成されていたものがなくなっていった。

鶴岡だけでやろうとしても、鶴岡だけでは核になる人が居ない。そうすると、藤島、鶴岡、そういう関係で櫛引(町)とかが核になった。それで、「じゃあ、最低でもやれるんじゃない？」という形で青年祭が始まりました⁴。

このBの発言でもわかるように、鶴岡市内よりもその周辺地域の方がつながりが弱まっていることが窺える。そこで、青年祭の準備を通して、地元での仲間作りが強調されていった。

「おまえたちも受け入れてくれないか」「何すればいい」「こういったメニューの中にいいところ、あるじゃないの?」「観光させたい」と。「うちは剣道とか柔道が盛んだ」と言えば、「じゃあ、そういった体験プログラムを、その町で受けてもらおう」とか、「うちは山、風光明媚な所だから」「じゃあ、そこはフェスティバルのフィナーレをやってもらおう」とか、動いてもらう青年たちに、まず、「じゃあ、やってみよう」と本気になってもらう。じゃあ、そのメンバーの代表格と私たちが、村長とか教育庁とか村長と会ってみよう⁵。

アマゾングループの中には公務員が多くおり、地方公務員のつながりで呼びかけるなどして、実行委員会にやる気のある人を加えていった。このような公務員同士の繋がりだけではなく、多様な仕事の人、ラジオ局に勤めていたり、農家だったり、という人たちへとネットワークは広がっていった。ホームステイを受け入れてもらう家族を見つけることによってもネットワークが広がっていった。

当時の鶴岡は下水道普及率も、まだまだ5割もいってないようなときで、「ぽとん便所」のような汲み取り式のトイレが多かった頃のことだった。トイレの状況だけではなく、当時の鶴岡周辺の人々の意識も閉鎖的で、「外国人」にあったこともなければ、もちろん家に招いたこともない家庭ばかりだった。そこで、ホームステイを依頼しても、「え、外国人来るのに、うち、こんな洋式トイレでもないぜ。ベッドもないぜ」「何食わせればいいんだ、刺し身ばかり、天ぷらか」という返答が来ていた。それに対して、実行委員会メンバーは「それでいいんだ」「今日はカレー

ライスっていえばカレーライスでいい。朝は納豆でいいんだ。同じように、家族が増えたと思えばいいじゃないか」と答えていた。さらに、その地域では若い人たちが都会に出て仕事していたり、学校で学んでいる現状があった。そこで「息子たちが帰ってきたと思えばいいじゃないですか」と言って説得しながらホームステイの受け入れ家庭を手探りで探していた⁶。

この国際青年祭をするのに集まった若者たちは20代から30代で、同じような年代なので、同級生の場合もあるが、多くは青年祭の準備段階で親しくなった。そこで、若者たちの既存のネットワークでできた集まりというよりも、新たに形成されたネットワークだった。

毛受は、このような地方による国際交流の高まりの理由を次のように述べている。小さい村のような地域社会ではどのような事業を行おうとしても、村社会の中での年功序列が強く、若者たちの意見は通ることは難しかった。それに対し国際交流に関しては年長者が介入することは少なかったので、若者たちが自由に自分たちのやりたいことをすることができた。「こうして国際交流は、地域の若い人たちが結集して自分たちのエネルギーをぶつけられる絶好の機会となった」(毛受 1996: 96)。国際青年祭に関しては、毛受が言うような社会構造的に内在している上下関係を指摘する声はなかった。それ以上に、若者世代の間で横のつながりが薄くなっており、自分たちのやりたいことを実現する機会が減っていった若者たちにとっての、ネットワーク形成の機会となっている要因の方が強いと言える。

地域の再認識の機会としての青年祭

青年祭がもう一つもたらしたのは、地元の若者たちによる地元の再認識の機会と、それがもたらす自己肯定感だった。

Aによれば、当時の若者たちは地元である庄内地域に魅力を感じていなかった。さらに、庄内に残るのは自分の意思ではなく義務として感じられていた。

きょうだいが、長男あるいは長女などが家に残る傾向はありました。

しかし魅力を感じないから、愚痴ばかりこぼすわけだね。自分たちは、家守らなきゃ、田んぼ守らなきゃ。でしょうがないんで地元に残っている⁷。

Aの言葉から東北の農村地域に「残された」若者たちの疎外感が感じられる。それに対し留学生などの外国人を迎えるための準備をすることで、当時の若者たちは地域の伝統文化や観光資源を新たに発見していった。当時のことを振り返ってBは次のように語った。

鶴岡やその周辺の本当に田舎、それだって、『何もない』と言うのではなくて、これだけ風光明媚な所があって、夏は夏なりに楽しんでるわけでしょう？だから、いいんだ。外国人に東京と大阪だけ知って帰ってもらうよりは、鶴岡を知ってもらえばいい。特に外国人から見れば、京都も素晴らしいけども、ここ（鶴岡）はもっといい。こういった暮らしを経験したかった。涼しい風が通り抜けるような、こんな広間がいっぱいあるような家に入ったことない。そういうのを聞くと、「そうかよ、まずは悪くないんだな」と思うわけですよ⁸。

鶴岡の若者たちが地元の価値を見出すきっかけになったのは、祭に参加した留学生たちの反応だった。留学生たちが、鶴岡での滞在期間の経験を肯定的に評価していた。さらに、ホームステイとの関係が祭りが終わってからも続き、定期的に鶴岡を訪れる留学生も現れた。そこには、ホストファミリーとの関係もあるだろうが、それとともに開催地である鶴岡市を称賛する留学生からの声が影響している。

たとえば、国際青年祭に参加したパキスタンの留学生は英語の詩を送っている。その中では、

The beauty of Yamagata-ken It will be remembered by everyone Yamagata is a symbol of love and peace (庄内国際交流協会編 1996: 62)

と表現している。つまり、その詩では、東北地方の山形、さらに庄内地方の美しさを讃えるとともに、そこで経験した愛や平和を称賛している。この詩が示しているように、留学生、外国人といった他者からの地元の賞賛が、青年祭に関わった鶴岡やその周辺の人々にとって、自分たちの地域や文化を相対的に見る機会となった。

以上の点に加えて、当時の国際交流活動の特徴となったのは、利他的行為というよりも、自分達も楽しもうという意識である。地元に残っている人たちが都市部に出た人たちをうらやましく思い、自分たちの所には、そういった価値がないと考えていたのに対し、まず自分たちがもっと楽しもう、というのが青年祭が続いた理由だった。庄内での草の根国際交流の一つの源流であるアマゾングループは、多くの交流を実践してきた。その特徴は、義務感や強制されたものではなく、自分たちも外国人も一緒に楽しみながら交流する。このようなイベントを中心とした国際交流のあり方は、出羽庄内国際村ができた後も続いていた。

国際交流の場としての庄内国際青年祭

庄内国際青年祭の始まりについて、関係者からのインタビューや『我ら地球家族』に基づいて再構築してみよう。最初のきっかけは鶴岡市内の天神祭のパレードに目立つコスチュームとメイクで臨み、サンバのリズムで踊るとパレードのコンテストで1位となり10万円を獲得したことだった。賞金を使って海外に関わる新たなことをしようとアマゾングループは考えた。それで何ができるか Y に聞くと、外国人を鶴岡に呼んでみることに、例えば留学生を呼んでみることに提案された。宿泊の問題に関しては、自分達の家に止めればいだろうということになりホームステイをすること

となった。このようにして庄内国際青年祭の輪郭が定まっていった⁹。留学生や企業から送られて日本に来た人たちは、日本では東京都と京都と大阪しか知らないでいるということが多い。それよりは、鶴岡のような地方都市についても知ってもらいたいと考えこの企画が始まった¹⁰。

1985年に国際青年年があり、その時に開催するように活動が開始した。庄内地域には14の市と町があったので、ならばこのうねりは14市町村全部に広げていこうという意気込みから始まった。

1985年8月1日から5日にかけて、第1回庄内国際青年祭が開催された。東京などからの留学生を中心とした外国人を鶴岡に招き、地元の観光地や伝統的な文化を体験してもらい、さらに地元の家でホームステイをした。初回に参加した「外国人」は80名だった。開催趣旨として、国際化に直面している中で、国による「“かみしも”を着た外交ではなく、肌と肌を接したぬくもりある交流」という表現で、民間を中心とした国際交流の取り組みの重要性をうたっている。世界の若者と庄内の若者が交流を図り、輪を広げ少しでも国際理解に役立ち、お互いの能力を高めるとともに、地域や国の発展に貢献することを願い庄内国際青年祭を企画したと述べている（庄内国際交流協会編 1996: 22）。交流による国際理解の重要性が謳われており、そのために以下に述べるような内容が行われた。

具体的な活動としてはホームステイ（民泊）による交流に加え、歴史的文化施設めぐり、日本の伝統文化や武道などの体験、そして本音で語るフォーラム、音楽、踊り等を通じて触れ合うフェスティバル SHONAI INTERNATIONAL YOUTH FESTIVAL を企画している。

以下では、第1回庄内国際青年祭の様子を、撮影された映像¹¹に基づき紹介する。

8月1日の歓迎レセプションが鶴岡市中央公民館で行われた。歓迎レセプションでは市長の挨拶から始まり、関連する町村の長や関係者の挨拶が行われるなど、かなり公的なものとして行われた。さらに、かたばみ太鼓

や庄内おばこが披露され、花笠踊りを留学生を含めて会場全体で踊った。2日目は市内の博物館やアマゾン資料館などの施設を巡った。3日目は茶道や花道などの体験とともに柔道や剣道などの体験を行なった。そしてその後留学生たちは、各自に割り振られた家でホームステイで過ごすこととなった。ホームステイで一夜を過ごした後、4日目は「21世紀に向けての青年の役割」「世界から見た日本」などに関するディスカッションを留学生と鶴岡の若者たちとが英語での通訳を交えて行なった。最後には月山高原で野外フェスティバルが行われた。留学生による地元の国の歌が披露され、中にはバイオリンを奏でるものもいた。さらに、南米音楽であるフォルクロレを演奏するバンドやサンバ同好会による演奏と踊りなども披露された。このような出身国も異なり、プロとは限らず素人が自分達の文化だけではなく、外国の音楽や踊りを踊るという混在した特徴がこのイベントの中に見出すことができる。この特徴は次に述べるワールドバザールにも受け継がれている。

その後、この青年祭は15回まで行われた。青年たちのボランティアによる運営という点では変化はなかったが、その規模は拡大していった。1回目に関わった行政は、鶴岡市を含めて1市2町村のみだったのが6回目には、庄内地区を全て覆う14市町村にまで広がった。9回目では参加した外国人は、過去最高の34カ国から200名が集まった。受け入れる側を見てみると、ホストファミリーとして外国人を受け入れたのは120家族にまでなった。またこのイベントを組織運営した実行委員は800名以上となっていた。15回開催したが、15回目まで参加外国人1900名以上であり出身国61カ国以上となった¹²。このイベントに関しては地方紙だけではなく、全国紙でも度々報道された。

ただ、ここで特記しておきたいのは青年祭においてはホスト側とゲスト側が明確に分かれている点である。ホスト側である庄内地域の若者たちは、地元の伝統芸能を披露し、観光名所を巡るツアーを企画し、柔道や茶

道といった典型的な日本文化をゲストたちに紹介している。彼らには本質主義的な自文化理解があったことを指摘することができる。

しかしその一方で、ディスカッションの場面ではホスト・ゲストの関係は取り払われ議論が行われていた。さらには、ゲスト側が自文化を紹介したり、庄内の若者たちが各国音楽を演奏するなどの越境的な文化実践を行っていたことがわかる。

出羽庄内国際村の設立と多文化共生

山形新聞によると、鶴岡市は63年（1988年）に、自治省リーディングプロジェクトの指定を受け、草の根の国際交流基盤づくり事業を進めている。それによって民間の草の根交流の機運が高まり、市町村の理解も深まってきた。この政策をより積極的に進めるためには、新たな拠点が必要となった。

この時期、すでに論じたように地方での国際化が「ブーム」になっており、また、自治省の後押しを受けて各地に国際交流センターができていた時期だった、その中で、鶴岡市の独自な点としては、やはりYが持つアマゾン資料の博物館的機能と国際交流センターの機能を併せ持つという点だった（山形新聞 1993年7月30日）。

この3つの要因が重なることで、国際交流+アマゾン民族館というコンセプトの国際村が建設されることとなった。アマゾン民族館（当時）館長であるYは以下のように山形新聞の取材に対して答えている。

全国でも政令指定都市などに相次いで国際交流センターが建設されていますが、博物館的機能を持つのは庄内だけなんです。例えばタイの少数民族展を開く際には、資料展示に合わせてセンターのホールで部族の音楽を演奏、調理室を生かして民族料理を味わってもらうことも

できます。言葉で異文化を理解するのは難しくても実物の人形を見れば納得してもらえましょう。資料の説明効果は大きく特色を最大限に活かして地域の国際化を進めたいものです（山形新聞 1994年1月11日）。

このように国際村は民族博物館と国際交流センターという資料展示やそれに関わるイベントを行う機関と国際交流を促進する機関を兼ねたものというそれまでにない形で活動を始めた。

国際村の活動としては、(1) 草の根の国際交流事業として、国際交流団体のネットワークづくり、(2) 国際化対応基盤整備事業として、在日外国人の生活相談や情報発信の事業、(3) 国際民族資料展示事業として、アマゾン民族館に関わる事業、の3つがあげられている（出羽庄内国際交流協会 1993,1994）。国際交流団体のネットワークづくりや民族資料館の運営とともに、在住外国人の支援も行われていた。しかし、その中でも国際交流に関する事業、特ににそれに関わるイベントが大きな事業として考え実施されていた。国際村の存在を市民に周知させることが重要で、そのために多くのイベントを行った。それは、来館者数を増やすことが目的だった。

この傾向が変わったのが、2002年からだった。その年に出された中長期ビジョンでは、外国人人口の増加とともに、「多文化共生社会の実現のために」課題解決型の専門性の高い事業が必要であるといっている（出羽庄内国際交流協会 2002）。この中長期ビジョンの方向性に基づき2003年以降、国際化、のちの多文化共生に関する在住外国籍住民への支援事業が増えていった。2003年では、それまで9事業だったのが14事業に拡大した。その内容としても、それまでの日本語教室に関連する事業に加えて、小中学校を紹介する冊子作成や医療マップの作成といった在住外国人の日常生活に関わる支援が開始されている。その後、多文化共生に関わる事業

数自体は大きく増えることはないが、支援事業は充実した。それとともに国際交流に関する事業は減り始めており、国際村としての活動方針に大きな変化が生じていることがわかる。その変化の大きなきっかけとなったのは、国際村スタッフが以下で述べるような日本語教室に参加し、実際に在住外国人と触れ、外国人が抱えている問題に直面するようになってからだった。

2022 年現在で国際村の事業は 3 つに分けられている。一つは国際交流事業であり、本稿で以下で取り上げるワールドバザールと国際音楽祭が当てはまる。2 つ目は国際理解事業であり、外国語講座やせかいの台所である。外国語講座は中国語や韓国語など複数言語の講座を入門、初級、中級に分かれて行なっている。さらに、フリートークという形で、自由にその言語で話すという講座も開講している。

せかいの台所は、平成 17 年から始まっており、年 6 回開催されている。講師役には日本語教室の受講生など鶴岡周辺にくらす外国籍住民が勤めている。受講生はホームページなどから公募しており、年会員 10 名と、各回 10 名ずつが参加している。

多文化共生事業としては、まずは英語、中国、韓国語での対応が可能な生活相談がある。勤務時間以外でも対応が可能であり、中には朝の 4 時頃に電話をかけてくる人もいるという。スタッフは相談内容に応じて、関係部署から情報を得て、必要な内容を外国籍住民に伝えている。最後までスタッフが対応しているところも特徴的である。

バングラデシュ出身の女性が今度、鶴岡に来る。旦那さんはすでに鶴岡に来ており、今度奥さんが来るので、その人の話し相手になりそうな人（バングラ出身女性）を探している。奥さんも以前鶴岡にいたことがあるが、心を病んでしまってそのもあり、バングラに帰っていたが、もう一度鶴岡に来るということ。そこで、まずは山形大学の国際

担当の人に山形市内の留学生にバングラデシュ出身の人がいないかどうか問合せ、次に酒田の国際交流協会に問い合わせた¹³。

このように、日常的な問題でも関係の部署に問い合わせ、必要な情報を最後まで移民たちに伝えている。

多文化共生事業のもう一つの大きな柱は、日本語教室である。日本語教室は、国際村とは別組織として活動しており、代表を中心とした運営委員会がある。活動は1993年から始まり、学習者は登録制で、初回登録料300円、年会費2400円となっている。ただし高校生までは年会費無料であり、登録料の300円だけが必要となる。日本語指導ボランティアは61名で、ほとんど幽霊会員はいないという。さらに、できるだけ多くの人にボランティアをしてもらえるように工夫している。学習者の方は、2022年1月段階で73名(25カ国)だった。コロナの影響もあり、少なかったということであり、2019年では148名、2020年では121名だった。

受講生とボランティアとの間のマッチングは国際村スタッフが行っている。マッチングにとって重要なのは、受講生が希望する学習日時、学習内容に合わせてボランティアを見つけることである。基本的には日本語教室は土日の午前中と平日の夜と決まっている。しかし、実際には受講生のニーズに合わせて柔軟に対応している。この柔軟さは開催日時に関してだけでなく、授業内容に関しても当てはまる。基本的には教科書として「みんなの日本語」を利用することになっている。しかし受講生の中には、漢字だけを教えてもらいたい、であるとか、日本文学をしたい、羅生門を読みたいという学生もいる。このような柔軟な対応は、国際村スタッフで日本語教室担当であるD氏は次のように述べる。

それ以外の人数があった場合、基本的にこちらが拒否することではなくて、「ちょっと待ってて。あなたは、この日、この内容を勉強した

いね」、それに合わせて、また、先生を探して、先生が居たらマッチングが1組できるという感じです。だから、基本の曜日と時間以外にも教室があります¹⁴。

というように、受講生のニーズに合わせて柔軟に対応している。さらに冬季通学が困難なためオンラインでの授業を行っており、さらに一時的に帰国している時もオンラインで授業を受けることができていた。コロナ禍でのオンライン授業も割とスムーズにできたという。

授業の合間の雑談の時に、受講生が日本での暮らしで直面している問題を相談することもある。例えば、妊娠した時の対応、バイクや車の免許を取りたい時にどうすればいいか、といった疑問に対して、日本語教師では対応できず、誤った情報をつたえてはいけないので、日本語教師は対応せずに、国際村の事務局に投げるになっている。つまり、日本語教室は単に日本語を教えるだけではなく、関わる人々の間でのつながりを形成するだけではなく、日本に暮らす外国籍住民の困りごとを吸い上げ、それに対応する仕組みにもなっている。

ワールドバザールの始まり

国際村で開催されるようになったワールドバザールの開催趣旨の変遷を見ていこう。1995年（平成7年）に開催された1回目では、出羽庄内国際村開村1年目を記念したものとして、NHKの番組と連携して開催されている。第1回実行委員会で配布された資料によると、開催趣旨として以下のように述べられている。

地域における国際交流の拠点“出羽庄内国際村”の開設1周年を記念し、NHK放送70周年記念事業「キッズ TV ユメディア号」全国

キャラバンと併せて、世界各国の物産等の紹介・販売をはじめ世界の踊りや歌、演奏、民族料理等の紹介を行う「出羽庄内国際村ワールドバザール」を開催し、各国際交流団体間の連携と交流の促進を図るとともに、地域住民各層への草の根国際交流の輪を広げ、出羽庄内国際村の一層の利用拡大を図る。(ワールドバザール実行委員会 1995)

そこから読み取れる特徴を以下のように4点にまとめることができる。

- 1 開催の主たる趣旨として、世界の物産や歌や踊り、料理を通じた異文化体験、すなわち国際交流の一側面としての異文化体験を主たる開催の目的としている。
- 2 このフェスティバルの目的は国際村に関わる国際交流団体の連携と交流を図ることとしている。これは設立趣意書にもさらに平成7年の事業計画にも国際交流団体ネットワーク事業があげられており、それを反映したものと考えることができる。
- 3 このフェスティバルは地域住民の間での「草の根」の国際交流の促進を意図している。市民レベルでの国際交流が、すでに述べたようにこの施設が出来上がる際のキーワードとして用いられており、また当時の活動のスローガンとして用いられていた。そこで、「草の根」という単語がワールドバザールの際でも用いられたと考えることができる。
- 4 このフェスティバルを行うことで出羽庄内国際村の周知及び利用拡大を目指している。このセンターは市の事業としてこの施設が建てられたから、その知名度を上げ利用者を増やすことが求められた。なぜならこの事業の成否の判断基準として、観客動員、利用者数が用いられていたからである。

1回目の内容を資料からまとめてみよう。1回目は2日間にわたって行われた。最初にNHKの番組収録が行われた後、地元の伝統芸能である羽

黒太鼓の演奏から始まった。ステージではその後、庄内国際青年祭の実行委員会の有志が南米音楽を演奏し、そのほか2グループが1日に数回演奏した。展示に関しては、国際交流団体が自分達の活動内容を紹介した。販売に関しては、タイや南米の民芸品を売っているかと思えば、カレーやチャイの飲食を提供しているところもある。さらに手作りクッキーや腕時計などを販売するところもあれば、輸入会社を販売するブースもあった。このフェスティバルが国際交流団体のネットワークの機会であったことは、準備段階として実行委員会が3回行われ、そこに各団体が参加していることからわかる。ただ、販売内容などから見ても、異文化として欧米文化と捉えるのが多かったが、それは提供する側にそれ以外の地域のもを提供する準備ができていなかったからだろう。

祭りの変容と担い手の多様化

以下ではワールドバザールの変化の様子を内容と担い手に注目してみたい。ワールドバザールの担い手を考える場合、単純にステージで演じるものだけではなく、ワールドバザールを運営するものを含めた担い手と考える必要がある。その担い手の中には、主に運営側として関わっている実行委員会のメンバーである鶴岡地区で活動している国際交流団体や地域団体がいる。演ずる者の中には、ステージで歌や踊りを披露する個人や団体があり、展示を行う国際交流団体、さらに飲を提供する個人や団体がいる。さらに、このような担い手を支える存在として市などの行政やボランティアがいる。さらにそれぞれの集団には国籍別に言えば日本人もいれば外国籍住民も含まれている。

まず初回以降のワールドバザールの変化を内容の面から見ていこう。図1からもわかるように、ステージパフォーマンスはなかなか増えなかったが15回目から10件以上となっている。20回目は記念大会として2日間

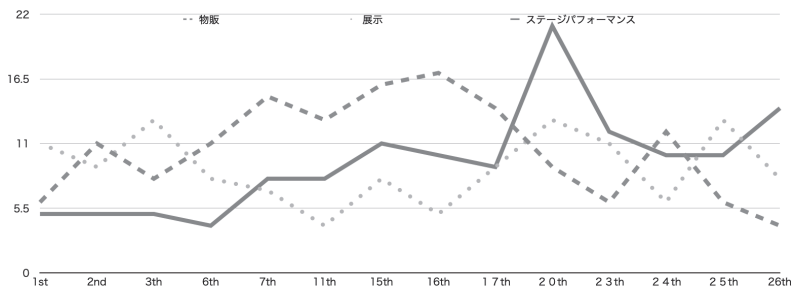


図1 ワールドバザールの内容の推移

ワールドバザール実行委員会配布資料にもとづき筆者作成

にわたって行なったためステージパフォーマンスが増えている。それ以降も10件前後を推移している。物販（飲食を含む）に関して言えば、2回目に10件を超えたが、その後減少した。しかし6回目以降は10件を超えており16回目には最も多い17件がものや飲食を提供していた。しかしそれがピークとなり、24回目は増えているがそれ以外はコロナの影響もあり減少傾向にあり10件を超えることはない。展示に関して言えば、3回目に10回を超え、その後も20回、25回と10件を超えたことはあるが3回目以降は5件前後となっている。

さらに、この担い手も関わる団体の特徴が時期に応じて変わっている。図2を見ていこう。ワールドバザールが始まった当初は、国際交流団体と国際交流を主たる目的としていない地域団体が主な担い手となっていた。しかし、徐々に、国際交流や国際協力団体の数は減少していき、また地域団体の協力も減っていった。このような団体が減少し始めたのは2001年頃からだった。国際交流団体が一番多かったのは1998年で13団体だったのが、2001年には10、2003年には9団体にまで減少している。

このことは実際に活動している国際交流団体が減少したことに要因がある。例えば、先述の庄内国際交流協会は、この地域の国際交流団体の草分

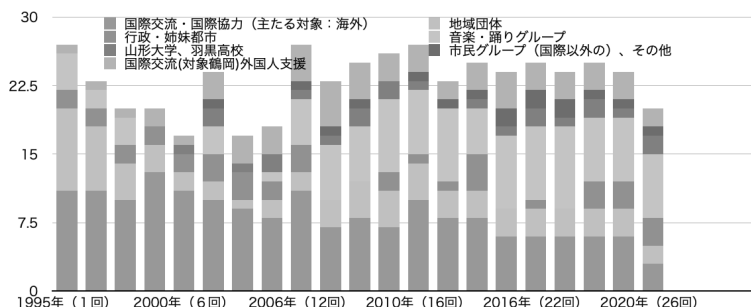


図2 ワールドバザールの出演団体推移

ワールドバザール実行委員会配布資料にもとづき筆者作成

け的存在にあたるが、その役割を国際村が担うようになったことがあり、活動を休止している。このように国際交流活動の中心を国際村が担うようになったことにより、結果的にこの地域の国際交流団体の運営に大きな影響を与えたことは否めない。さらに、このような市民活動を支えている年齢層の高齢化も同時に起こっている。

それに対して、運営にかかわることなくいわば純粹に演技手としてワールドバザールにかかわる団体が増えていった。それは音楽や踊りをステージで披露する団体である。その境となるのが、2009年の15回目である。それまでは、地域の国際交流団体がワールドバザール参加団体の中で最も多かった。それが15回目になると国際交流団体が7であるのに対し、音楽踊りのグループが8となりその数が逆転した。このように国際交流関係のものが減ってきており、多文化の音楽や踊り、そして特に料理を提供するという側面が強調されるようになっている。

ワールドバザールの担い手は、国際交流団体が主たる初期から、現在のように運営は国際交流団体が中心だが、ステージ発表では歌や踊りといった「趣味」のグループの参加が目立つように変化した。また11回目からは日本語教室が参加するようになり、さらに山形大学への留学生も加わる

ようになっている。日本人中心に実施されていたところに外国籍住民も担い手としてより多くの人々が参加するようになる。つまり、ワールドバザールは、初期には地域住民の国際交流団体が主として行ってきた。それは外国人の視点から見れば、「彼らの」イベントに参加している形だった。それが、担い手の中に外国人が加わることによってフェスティバル自体の意味が外国籍住民にとっても「自分たち」のイベントに変わっていることがわかる¹⁵。以下では、展示、飲食、ステージに分けてそれぞれから見出すことができるワールドバザール及び多文化フェスティバルの特徴について析出する。

リミナルな経験の場としての飲食

2022年のワールドバザールの2日目は飲食中心である。主な会場となる国際村ホールの中では、10カ国の料理が提供されている。そのうちの一つは、青年会議所が出している日本料理としてのお弁当などだが、それ以外は、海外のものである。韓国料理は、国際村の中で営業している韓国レストランのオーナーがボランティアを交えて料理を作り提供している。それ以外の海外の料理は、日本語教室で日本語を学んでいる学習者が、中心となって料理を提供している。

中には、2台のキッチンカーが出店している。1台は、全国展開しているチェーンのカレー屋である。もう1台は、餃子や小籠包を売る車であるが、これは元日本語教室に通っていた中国出身の女性が出店している。

飲食に関しては担い手に大きな変化が生じている。初期には、交流団体が関わっている外国出身者に地元の料理を作ってもらったことが多かった。中国や韓国出身者やブラジル出身者がいた。その中には、現在では店を経営するようになったり、キッチンカーで営業をしているものも含まれる。

それが日本語教室がワールドバザールに関わると大きく変わった。日本

語を学んでいる受講生がワールドバザールで自国の料理を振る舞うようになった。さらに国際村の事業の一つである、世界の台所の講師をした受講生が、続けてワールドバザールで出店することもあった。日本語教室の受講生には大学の留学生も多く含まれており、山形大学農学部への留学生は世界中に広がっているため、アフリカから南米まで多様な地域の料理が提供できるようになっている。

さらに飲食の提供の場面では、ターナーがいうリミナルな状況（ターナー 2020）と呼んでいる、日常とは立場が逆転している状況が形成されている。料理の提供は受講生が中心となって決めていく。例えば、何の料理を出し、料金はいくらに設定し、材料の購入の準備などの準備を彼らが中心になって行っていく。その活動を日本語教えているボランティアが協力している。その場面では、日本語教室では教える側：日本人ボランティアが、受講生：外国籍住民の指示に従い、さらに彼らの国の料理を教わることになる。そこでは日頃の日本語教室での教える側と教わる側の立場が逆転している。これは外国人住民への支援の場面では、どうしても多数派側である日本人が、少数派である外国人に対して教える、外国人が教わるという権力関係が成立しがちである。しかし、共生が成立するには、両者が対等な関係であることが必要である。ワールドバザールに見られる立場の逆転やまた日本語教室の中でも、高齢の日本人に対して技能実習生がスマホやインターネットの使い方を教えることがあることから、国際村の中にでの日本人と外国人との関係は、一方的な教え、教わるという関係ではなく、お互いに補い合う相互補完的な対等な関係が成立していると考えることができる。

自文化呈示と再確認機会としてステージ

2022年の1日目のステージ発表は、地元で活動しているダンスクラブ

によるタヒチアンダンスショーから始まった。子供たちの演技には親がカメラで撮っており、集客効果も大きいだろう。フォルクローレ演奏のDewandesも地元で活動する南米音楽を演奏するバンドである。また、このメンバーの中には、出羽庄内国際村が関わっている音楽祭の今年度の実行委員長が含まれている。また山形大学のインドネシアからの留学生によるアングルンという地元の楽器の演奏やセネガル出身者による空手の演舞なども行われた。それ以外は地域の素人の演奏であるが、市民の文化祭として見た場合、自分たちが住んでいる町にこのような多様な文化的背景を持った人がいると知ること重要だろう。

このようなグループの中には、インドネシアの留学生たちのグループIPP Yamagataのようにワールドバザールの数ヶ月前から、演目を決め、そ練習を定期的に行なっているところもある。彼らが演目を決める際には、インドネシア独立の際に歌われた歌とともに、現在インドネシアで流行っている歌を選曲した。前者のような、彼らから見たら自国の典型的な歌は、いわば本質主義的に文化を捉え、それを他者である日本人に提示したいという思いからだ。このように多文化フェスティバルで自文化を提示するグループの中には、自国の伝統的な楽曲や踊りを披露する場合もあれば、それに捉われず、現在はやっているポピュラーソングを歌う場合もあれば、日本の「ふるさと」のように有名な曲を母国語で歌う場合もある。

さらに日本人グループが海外の音楽や楽器などを演奏する場合がある。南米音楽を演奏するグループがあれば、中国の伝統的な楽器である二胡を演奏するグループもいる。彼らは中国の曲とともに、「桜」や「川の流れるように」など日本の曲も演奏していた。このようにワールドバザールでは、その国の本質主義的な理解を反映した典型的な文化実践が行われるとともに、それだけではなくポピュラー文化であったり、他文化を流用している場合もある。つまり、どのような曲を、どのような楽器で、踊り方で、

誰が演じるのかに関して越境しているのだ。

IPP Yamagata のメンバーは、何の歌を歌うのかを決めたら、毎週のように国際村のホールや部屋を借りて歌の練習を行っていた。自文化を提示する目的でパフォーマンスしている場合もある。それは異国で自分かを提示する機会になるとともに、その練習のために定期的集まることも必要になる。そこで飲食提供の準備と同様に、同国出身者とのネットワークを形成し、さらに強化する機会になっている。フェスティバルを開催することで、エスニックマイノリティグループにとって、自分達の結束を強める働きがあり、さらに参加する各団体とのネットワークを形成している (Mackley-crump 2015: 54)。このように多文化フェスティバルがマイノリティ同士だけではなく、より広い社会との接点をもたらし社会統合に寄与している。

さらに、外国籍住民にとっては食べ物や踊りなどで自文化を提示し、それに対して観客から拍手や美味しいという言葉が返ってくることで、自文化の承認を得るとともに、自分達で自文化の再確認をする機会ともなっている。外国籍住民にとってフェスティバルでパフォーマンスを行うことは、自分達の踊りや歌、料理を多数派社会の中で実践することで、マジョリティ社会に搾取されるだけではなく、自分のアイデンティティを再確認する機会になっている (Duffy 2005: 683)。また、観客として参加している者にとっては、日常では出会うことのない異文化と接することで、外国籍住民が身の回りに暮らしていることを知り、社会調和や統合を促す機会となっている。さらに異文化理解の機会が与えられる点を指摘している (Lee 2012: 13)

このようにワールドバザールは、外国籍住民にとっては自国出身者とのつながりを強化する機会となるとともに、自文化を日本人に提示し、また再確認する機会になっていた。さらに日本人住民にとっても外国人住民にとっても、このように、自分達の文化を固定的に捉える側面とともに、

様々な形で流用や越境が行われており、そのような本質主義的な見方から相対化する機会ともなっている。そしてこれは日本人住民と外国籍住民との間の関係にも言えて、彼らの権力関係を相対化し、お互いに教え合う関係を築く機会ともなっていた。

出合いの場としてのワールドバザール

ワールドバザールの意義について考える際に、注目しなければいけないのは日本人スタッフにとっての意義である。特にボランティアとしてワールドバザールの担い手となった人について注目したい。

2022年には、公募として集まったボランティア数は31名だった。ボランティアとしては、そのほかに実行委員のつながりのある人や日本語教師の人もいる。高校生のボランティアでは、これまでは高校のボランティア部から、一度に何人と申請があったが、コロナ以降は高校の方で自粛しているらしく少なくなり去年はいなかった。それに対して今年は個人ベースでの申し込みがあった。以下では、個人的にこのフェスティバルに関わるようになった人の例を紹介して、彼らにとってのワールドバザール参加の意義について考える。

事例1

Nは、2004年頃に子育てを終え、自分は今後何をしていけばいいだろうと迷っていた。その頃、韓国ドラマにハマり、役者さんが話している韓国語を理解し合いと思うようになり、市内で韓国語の初級を受講した。1年間受けてさらに上級を受けようと思い、村の韓国語中級クラスを受講した。通っている間に「ふるさと」がオープンし、そこで韓国出身の阿部さんと知り合った。韓国語を教わったり、家に行ってご飯を食べるようになっていった。今では、「ふるさと」の厨房に入って、お手伝いをするこ

ともある。

韓国語を勉強するまでは、Nは鶴岡市以外で暮らしたことはなく、鶴岡で一生過ごすのだろうと考え海外に対する興味もなかった。しかし、韓国語を勉強してからは、韓国にいったことも3回あり、世界がもっと広いことを知るようになった。さらに、Aとともに、国際村に來ている留学生や技能実習生の子たちと触れ合う活動をしている。阿部さんの家に留学生が集まって食事会をやったり、グラウンドを借りて小さな運動会をすることもあった。誕生会や卒業お別れパーティなども定期的に開いている。さらに3年前からは、やはり留学生や技能実習生とともに、BBQを食べるから、海の清掃をしに行くようになっている。

鶴岡でのみ、さらに家族でのみ生活していた女性が、国際村での韓国女性との出会いによって、単に外国＝韓国への興味を満たすだけでなく、家を出て、社会参加のきっかけとなった。

事例2

Sは以前は司法書士の補助として働く。高卒で働き始め、鶴岡を離れて暮らしたことがないという。現在は酒田出身の旦那さんと暮らしている（婿取り）。ゴスペルでの参加から国際村とのつながりが始まる。Sはアフリカのゴスペルを聴き、こういうのをやりたいと思いグリーマーズを立ち上げたら、1年後くらいのワールドバザールの際に歌っていたら、前で見っていたアフリカ出身留学生らが、あなたたちと一緒に歌いたい、と言ってもらい、それから彼女たちはアフリカの影響を受けたゴスペルを歌っている。自分がしたいことができるということで運命な縁を感じたという。

さらにゴスペルの活動とともにSは社会的な役割を積極的に果たすようになった。また、グリーマーズの時には別にリーダーを置いていなかったが、自分係の代表の役割をやっていた。国際村のイベント、ワールドバザールや音楽祭に関わるようになり、そこからボランティアで活動する

ことが始まっていき、ボランティア設立につながっていく。

事例2では、趣味として始めたゴスペルを通して、国際村と出会うようになり、そこから国際村で行っているイベントに積極的に関わるようになっていった。ボランティアとして社会参加する中で、身の回りの問題点に気がつくようになり、それを改善するための実践へと向かうようになった。

これらの例から、ワールドバザールを中心に国際村の活動も視野に入れて日本人ボランティアにとっての意義について考えよう。日本人スタッフにとって、ワールドバザールは「出会い」の場となっている。もちろん、異文化という他者との出会いという側面がある。しかしそれだけにとどまらず、国際村で行われている様々なイベントに参加することで、より広い社会と出会うきっかけになっている。ここに、1980年代に流行った「国際交流」の理念の残存を見出すことができる。当時の国際交流では、他者である外国人と触れ合うことで、自分達が住んでいる地域を相対化できるようになり、自分達の殻を破ってあるべき社会を実現するために、積極的に社会参加を促していた。現在国際村では、このような意味での国際交流を促進することはないが、結果的に日本語教室や外国人との関わりから、現状の課題を見出しそれに対し積極的に関わる人が形成されていると言える。

おわりに

これまで明らかにしたことをまとめていこう。山形県鶴岡市では、1980年代に日本で広がっていった地方の国際化の流れの中で、アマゾングループの活躍による庄内国際青年祭が始まった。そこでは、草の根の国際交流というスローガンのもとで、異文化に触れ合うためのイベントが開催され、それが主な活動になっていた。主催していたアマゾングループにとっ

て、庄内国際青年祭や国際交流は、当時少なくなっていた同世代の横のつながりを構築する機会になっており、また否定的に捉えがちであった自分たちの地域の価値を再発見し、自己肯定感をもつ機会となっていた。祭りの場面では彼らは主催者側であり、自分たちの文化を他者である留学生に提供する側であ離、それによって留学生たちに日本社会の多様さを示すことを目的としていた。このような文化を本質主義的に捉える側面も見出せたが、国境を越えた対話の機会もあり、また越境した文化実践も行われていた。つまりアマゾングループを中心とした庄内地域の若者たちにとって、多文化に関わるフェスティバルを開催することは、留学生という他者を通して自分たちの地域や文化を見直す機会になっていた。そこでは、国際交流を通してオルタナティブな地域社会を想像するきっかけになっていた。

青年祭の成功は、この地域での国際交流のイメージをイベント重視のものとして定着させた。それは出羽庄内国際村ができてからも初期には続いた。出羽庄内国際村では、2002年以降、在住外国人支援に力を入れるようになり、多文化共生事業として生活相談などで緊密な外国籍住民への支援を行ってきた。さらに村とは別組織として日本語教室があり、授業時間や内容に関して受講者中心に柔軟な対応をとっており、また授業中の会話から受講者の抱えている日常生活の中での問題を吸い上げることも可能になっていた。このような国際村スタッフ及び日本語教室の指導ボランティアと受講者との間の緊密な関係が、外国籍住民とのネットワークを形成するようになった。またこの関係は教え教えられ、という権力が伴う関係ではなく、相互補完的な関係になっていた。

人的資源の拡充は国際村のさまざまなイベントで生かされていた。たとえばせかいの台所で自国の料理を指導する立場に多くの外国人を担ってもらうことができ、さらにワールドバザールではステージ発表、飲食の提供によって多様な演目、料理を提供することができるようになり、それは、

既存研究でも明らかにしているように、自文化の再認識の機会であるとともに、日常では経験できない多様なコンテンツを提供することが可能であり、日本人住民にとってワールドバザールをより魅力的にすることが可能になった。さらに、ワールドバザールで実践しているのは、各文化を示す典型的なものばかりではなく、様々な流用や越境が行われていた。

このような多様なコンテンツに触れることによって、日本人住民にとっては、ワールドバザールを中心とした国際村で行っているイベントに参加することは、異文化への入り口となっていた。つまり、他者である異文化「外国人」と出会い・交流する機会になっている。そして、ワールドバザールに関わる人々で見たように、そこで国際村のその他の活動についても知るようになり、日本語教室、その他のイベントへの参加するものも現れている。さらに外国籍住民にとっては、同胞とのネットワークを強化する機会にもなっており、また自文化を提示し承認してもらう機会ともなっていた。

さらに入り口としてのワールドバザールのような多文化フェスティバルは、これまでの批判であったように表面的で一過性のもので終わってしまう場合がある。しかし出羽庄内国際村の場合では、ワールドバザールに参加した人が外国語講座を受講するようになったり、世界の台所に参加するようになったり、さらに日本語を教えるようになるといった、出会い・交流の継続化が可能になっている。出羽庄内国際交流協会で活動し、国際村の日本語教室にも深く関わった加藤氏は山形新聞の取材にこのように語っている。「楽しい催しだけでなく、悩みの相談に踏み込んだ時点で、「交流」から「共生」に発展できる。」(平成9年2月12日山形新聞)つまり、多文化フェスティバルには、社会統合に向けた重要な機能があることは見てきたが、それが一過性のものと終わってしまうかもしれない。しかしワールドバザールを超えた様々な活動に参加していくことで、日本人住民は外国籍住民と親密な関係を構築し、さらに外国籍住民が直面している問

題を知ることができるようになる。このような関係づくりは「共生」の実現にとっては必要である

さらに、様々な団体が参加しており各団体ごとに参加目的があるが、ワールドバザールではそのような多様な目的がどれか一つに絞られることなく、緩やかに共在している。さらに日本人だけではなく外国籍住民も運営に関わることで、単に「日本の」フェスティバルではなく、雑種化されたフェスティバルとなっている（渋谷 2021）。飲食やステージ報告でも触れたように、そこで提供されるものには日本風にアレンジしたものもある。さらに出身国の伝統的な芸能だけではなく、その国で今はやっている歌や踊りといった現代的なポピュラーカルチャーも含まれている。またパフォーマーもその国出身者とは限らず、また専門家がが行なっているのでもない。以上のことから、ワールドバザールという空間は、多様なアクターが正当性に捉われることなく多様な文化的実践を行っている共在の空間であると言える。

* 本研究は JSPS 科学研究費補助金（19k01234, 代表：渋谷努）および 2022 年度中京大学内外研究員制度（その他）の支援を受けたものです。

注

- 1 出羽は現在の秋田県及び山形県を含む地域の名称である。庄内は現在の鶴岡市と酒田市を含む江戸時代の地域名である。
- 2 出羽庄内国際交流協会が出羽庄内国際村を管理運営している。しかし、ホームページなどで活動主体を出羽庄内国際村としていることから、本稿でもそれに準じる。
- 3 2021 年 11 月 25 日 A 氏へのインタビューより
- 4 2022 年 9 月 10 日 B 氏へのインタビューより
- 5 2021 年 11 月 25 日 A 氏へのインタビューより
- 6 2021 年 11 月 25 日 A 氏へのインタビューより
- 7 2021 年 11 月 25 日 A 氏へのインタビューより

- 8 2022年9月10日B氏へのインタビューより
- 9 2022年9月7日A氏へのインタビューより
- 10 2021年11月25日A氏へのインタビューより
- 11 第1回庄内国際青年祭 出羽庄内国際村所蔵
- 12 9回目までは「われら地球家族」20－21より。10回目から15回目は荘内日報の記事に基づく。
- 13 フィールドノートより：20220308
- 14 2021年11月25日のD氏へのインタビューより
- 15 外国籍住民が主体的に関わることで「自分達」のイベントにした例に関しては渋谷2022を参照。

参考文献

- アルジャー、チャドウィック F., 1987『地域からの国際化』吉田新一郎編訳, 日本評論社
- 出羽庄内国際交流協会, 1993「設立趣意書」
- 2001「第7回ワールドバザールチラシ」
- 2002「中・長期ビジョン(2003-2007)」
- Duffy, Michelle, 2005, Performing identity within a multicultural framework. *Social & Cultural Geography* 6 (5), p.677-692
- 榎田勝俊(編), 1996『国際交流入門』アルク社
- ガッサン, ハージ, 2003『ホワイトネーション: ネオ・ナショナリズム批判』保莉実, 塩原良和訳, 平凡社
- 樋口直人, 2009「「多文化共生」再考—ポスト共生に向けた試論」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』7号, 3-10頁.
- 加藤憲一, 2001『NGO 辺境からの挑戦: カラモジア運動の20年上』毎日新聞社
- 初瀬龍平(編), 1988『内なる国際化』三嶺書房
- Lee, Insun Sunny, Arcodia, Charles, Lee, Timothy Jeonglyeol, 2012 Key Characteristics of Multicultural Festivals: A Critical Review of the Literature. *Event Management* 16, p93-101
- Lipnack, Jessica, Stamps, Jeffrey, 1984『ネットワーキング』(Networking) 正村公宏監訳, プレジデント社
- Mackley-crump. Jared, 2015 The Pacific Festivals of Aotearoa New Zealand: Negotiating Place and Identity in a New Homeland, Univ of Hawaii Pr.
- モース, マルセル 2014『贈与論』森山工訳, 岩波書店。
- 毛受敏弘(編), 2003『草の根の国際交流と国際協力』, 明石書店

ワールドフェスティバルに見る多文化フェスティバルの変容と機能（渋谷）（211） 56

森山工, 2022『「贈与論」の思想：マルセル・モースと＜混ざりあい＞の倫理』,
インスクリプト

渋谷努, 2022a「多文化に関わるフェスティバルの現状と課題—アンケート調査の
結果をもとに」社会科学研究 42（2）, p1-34

2022b Microcosm for Multicultural Community Building and Festivals: A
Focus on Homi ni OidenIn Nobuhiko Nibe（ed）Toyota City in Transition,
Springer pp.195-206.

庄内国際交流協会編, 1996『我ら地球家族』庄内国際交流協会

竹沢泰子, 2009「序—多文化共生の現状と課題」『文化人類学』74（1）, 86-95

ターナー, ビクター『儀礼の過程』富倉 光雄訳、筑摩書房

ワールドバザール実行委員会 1995 - 2023「第1回運営委員会配布資料」